

社会認識の発達と9, 10歳の節

発達心理学教室 田丸敏高

Development of Societal Thinking and the Changing Period of 9 or 10-Year-olds

Toshitaka TAMARU*

問題と目的

認識の発達においては、小学生の年齢にあたる児童期は1つの発達期を構成している。ピアジェは、操作の発達という観点から、児童期を具体的操作の段階と呼んだ⁽¹⁾。ヴィゴツキーは、概念の発達から、児童期を生活的概念から科学的概念の移行期と考えた⁽²⁾。ワロンは、認識発達だけでなく、社会的発達を含む発達全体の姿をみることによって、児童期を多価的人格とカテゴリー的思考の段階と名付けた⁽³⁾。このように、発達理論上、児童期、すなわち、小学生時代は、ある1つの共通の特徴を示すと考えられている。

ところで、1つの発達期にあるからといって、小学生の時期に心理諸機能は発達しないというわけではない。小学生の時期には、認識を含めて心理的諸機能が飛躍的に発達する。このことは、学校教育の内外で確かめられてきた事実である。

児童期の発達は、とくに小学校中学年ころ明瞭に示される。幼児性をたぶんに残した小学校1, 2年生や性的な発達にともない思春期的な心理の芽生えをもつ5, 6年生と比べて、3, 4年生はもっとも児童らしさをあらわす時期である。また、同時に、小学校3, 4年生は、発達の移行期でもある。その時期の発達は、「9, 10歳の節」として取り出され、小学校低学年や高学年の発達と区別してとらえられている。「9, 10歳の節」は、わが国の教育界において、聴覚障害児教育のなかで、知的な発達が9歳レベルのところである壁にあたる、という指摘に1つの端を発する。それは、言語的な障害に起因する、具体的思考から抽象的思考への移行の困難という事情に基づいて、提起されたものである。さらに、一般の教科学習においても「低学力」の子どもは、9, 10歳(小学3, 4年生)ころからつまづきをみせること、美術教育において「知的リアリズム」から「視覚的リアリズム」への移行期にあたること、などが指摘されている⁽⁴⁾。

児童期における発達の移行は、心理学的な発達研究において従来指摘されてきたところでもある。ピアジェやヴィゴツキーの認識発達の理論においても、9, 10歳ころを境に抽象的な思考へ移

* Department of Psychology, Faculty of Education, Tottori University

行するということがデータで示されているし、ワロンの思考研究においても、5歳半から9歳は思考の起源の時期として扱われ、それ以降と区別されている。つまり、児童期を前半と後半の2つの発達段階として理解する可能性が示唆されているといつてよいであろう。

ただし、「9, 10歳の節」という区切りは、「1歳半の節」のような他の発達の移行期とは異なり、その通過年齢は、子どもによってかなりの幅があるし、また、同じ子どもの認識発達でも領域（自然認識や社会認識、あるいは数学的な認識など）により、その領域に通曉しているかどうかで異なっている。さらに、「9, 10歳の節」以前の認識発達の形態は、小学校高学年になるとすっかり姿を消すというものではなく、いつまでも残り続けるという特徴をもっている。そのため、認識的課題に対する正答率の年齢的变化でもって児童期の発達段階の違いを示そうとしても、そうかんたんではない。

われわれは、一連の社会認識の発達に関する研究から、児童期における発達段階の違いに注目してきた⁽⁶⁾。そこで、本研究では、社会認識の発達に関わる問題を工夫し、小学生との対話を試みる。小学校2年生と5年生の児童に一連の質問をもって面接調査を実施し、その回答の仕方を比較検討することによって、児童期低学年から高学年にかけての変化がいかなるものであるかを明らかにすることにする。

方 法

手続き 対話法による個別面接調査を行う。その際、たんに結論としての回答を求めるのではなくその理由をたずね、結論に至る過程を探る。1人あたりの所要時間は約20分程度である。対話の過程は、カセットコーダーで録音し、それをそのまま起こしたものを一次資料とした。なお、質問によっては図版を用い、それを見せながら回答を求めた。面接には、筆者も含め、1991年度後期発達心理学演習参加者11名があたった。

被験児 鳥取市内商業地域の小学校の2クラスの児童に面接した。信頼できる記録として残ったものは以下の通りである。

小学校2年生 25人（男15人，女10人）

5年生 22人（男12人，女10人）

日 時 1992年1月24日午後

場 所 鳥取市A小学校教室

質問項目 質問した事項は23項目であったが、今回分析の対象とするのは以下の項目である。

1. (魔法使いの絵を見せながら)「おまえの願いを何でもかなえてあげよう。ただし、3つだけだよ。さあ、どんな願いでもいいから、3つ言ってみなさい。」あなたの願いを3つ教えてください。
2. あなたは、お年玉をもらいましたか。いくらくらいもらいましたか。お年玉は、誰がくれましたか。お父さん(お母さん)は、そのお金をどうやって手に入れるのでしょうか。
3. あなたは、お金持ちになりたいですか。どうしたらお金持ちになることができますか。みんながお金持ちになることができますか。
4. もし、この世の中からお金がなくなったらどうなると思いますか。
5. お金はどこで造っているのでしょうか。ここでは、お金を好きなだけ造っていいので

- しょうか。お金をどんどん造ったら、みんながお金持ちになれるでしょうか。
6. あなたは、早く大人になりたいですか。
 7. あなたが20歳の時は、あなたはこうなっていると思いますか。40歳の時は。80歳の時は。
 8. 大人はどうして仕事をするのだと思いますか。
 9. 大きくなったときやってみみたい仕事がありますか。
 10. (順番に図版を示しながら) 将来この仕事をする人になりたいですか。
お店屋さん／お百姓さん／先生／銀行員／医者／歌手／コック

結 果

1. 3つの願い

ここでは、子どもが自発的に述べた願いについて取りあげる。3つの願いをよどみなく述べる子どももいたし、「特にない」と答える子どももいた。「ない」と答えた子どもには、「では、ほしいものは?」と聞き返すと答える場合もあったが、それについては結果からは除外した。

まず、2年生に多いのは、ファミコンなどの「物がほしい」と答える子どもである。たとえば、T. J. (8.07; M 注8歳7か月男子) は、「ファミコンのカセットがほしい。スーパーファミコンがほしい。ゲームボーイがほしい」と答えている。3つの願いのうち1つ以上「物がほしい」とした子どもの人数は、表1に示したように、2年生8人(32%)、5年生3人(14%)であった。また、勉強や成績など「学業の望み」も2年生に特徴的で、たとえば、K. K. (8.05; M) は、「成績がオール5とか・・・で、字がきれいになって、中学や高校や大学の問題もわかるようになりたいです」と言っている。「学業の望み」は2年生が9人(36%)、5年生が3人(14%)であった。

次に、2つの学年に共通してみられた答は、「足がはやくになりたい」や「やさしい子どもになりたい」など「能力・性格」の願いであった。2年生が10人(40%)、5年生が11人(50%)がそれをあげていた。また、「小遣いを上げてほしい」とか「お金持ちになりたい」など「お金がほしい」とする願いも両学年に共通してみられ、2年生5人(20%)、5年生4人(18%)であった。

「家族が元気に暮らせるように」とか「お母さんをやさしくする」、「友だちがたくさんできる」など願いに「人間関係」が示されているものは、5年生の方が多く、2年生4人(16%)に対し、

表1 3つの願い

	2年生	5年生
物がほしい	8 (6, 2) 32	3 (3, 0) 14
学業の望み	9 (5, 4) 36	3 (2, 1) 14
能力・性格	10 (6, 4) 40	11 (4, 7) 50
お金がほしい	5 (3, 2) 20	4 (4, 0) 18
人間関係	4 (2, 2) 16	12 (6, 6) 55

人数(男, 女)
パーセント

表2. お年玉の総額

	2年生	5年生
1万円未満	1 (0, 1)	2 (1, 1)
1～2万円	8 (6, 2)	2 (1, 1)
2～3万円	10 (5, 5)	9 (5, 4)
3～4万円	4 (3, 1)	4 (3, 1)
4～5万円	1 (0, 1)	2 (1, 1)
5万円以上	1 (1, 0)	3 (1, 2)

人数(男, 女)

5年生12人(55%)であった。3つの願いの回答全体の中で、「人間関係」に言及したかどうか学年差について χ^2 検定してみると、 $\chi^2=7.74$, $df=1$ で1%水準で有意であった。

2. お年玉

お年玉については、2年生も5年生も全員が「もらった」と回答している。

その金額については、1万円単位で区切ってみると、2年生では、2~3万円が最頻値で10人(40%)で、ついで、1~2万円が8人(32%)であった。5年生では、2~3万円が最頻値で9人(41%)で、次いで、3~4万円が4人(18%)であった。表2は、お年玉の総計金額について1万円きざみでそれぞれの人数を示したものである。

お年玉は誰がくれたかについては、10人以上から名前があがったのは、両学年とも、「父」「母」「祖父」「祖母」であった。なお、両学年あわせていちばん多かったのは「祖母」28人であった。

お父さん(お母さん)はそのお金をどうやって手に入れるのかという質問に対する回答結果を分類すると、表3のようになった。「働いて」ということに言及した者は、2年生が14人(56%)で、5年生が20人(92%)であった。また、「その他」の理由、銀行やおつりを指摘した者は、2年生のみで4人(16%)であった。また、「わからない」という者は、2年生が7人(28%)で、5年生が2人(9%)であった。これについて、 χ^2 検定を行ったところ、 $\chi^2=7.68$, $df=2$ で5%水準で有意であった。

3. お金持ちになれるか

お金持ちになりたいかの質問について得られた回答を分類すると、表4のようになった。2年生では、「はい」が19人(75%)、「いいえ」が5人(21%)、「わからない」が1人(4%)であった。5年生では、「はい」が7人(32%)、「いいえ」が15人(68%)であった。これについて、 χ^2 検定を行ったところ、 $\chi^2=10.77$, $df=2$ で1%水準で有意であった。

どうしたらお金持ちになれるかという質問に対して得られた回答を分類すると、表5のようになった。なんらかの形で「働く」に言及した者は、2年生で15人(71%)、5年生で18人(89%)であった。また、貯金について言及した者は、2年生8人(38%)、5年生3人(17%)であった。

表3. お金の入手法

	2年生	5年生
働いて	14 (9, 5) 56	20 (11, 9) 91
その他	4 (3, 1) 16	0
わからない	7 (3, 4) 28	2 (1, 1) 9

人数(男, 女)
パーセント

表4. お金持ちになりたいか

	2年生	5年生
はい	18 (11, 7) 75	7 (6, 1) 32
いいえ	5 (3, 2) 21	15 (6, 9) 68
わからない	1 (1, 0) 4	0

人数(男, 女)
パーセント

表5. どうしたらお金持ちになれるか

	2年生	5年生
働く	15 (9, 6) 71	16 (8, 8) 89
貯金	8 (6, 2) 38	3 (3, 0) 17

人数(男, 女)
パーセント

表6. みんながお金持ちになることができるか

	2年生	5年生
はい	3 (2, 1) 14	5 (3, 2) 25
いいえ	9 (6, 3) 43	15 (8, 7) 75
わからない	9 (5, 4) 43	0

人数(男, 女)
パーセント

(複数回答を含む) なお、この質問に答えた人数は、2年生21(男13, 女8), 5年生20(男11, 女9)であった。

みんながお金持ちになることができるかという質問について得られた回答を分類すると、表6のようになった。その際、「できるかもしれない」なども含めて肯定的に答えた者は「はい」として、「人それぞれ」や「時によって違う」なども含めて否定的に答えた者は「いいえ」として、分類した。2年生では、「はい」が3人(14%), 「いいえ」が9人(43%), 「わからない」が9人(43%)であった。5年生では、「はい」が5人(25%), 「いいえ」が15人(75%)であった。これについて、 χ^2 検定を行ったところ、 $\chi^2=10.98$, $df=2$ で1%水準で有意であった。

4. この世の中からお金がなくなったら

もしこの世の中からお金がなくなったらどうなるかという質問に対しては、さまざまな回答が示された。2年生では、「貧乏になる」や「何も買えない」、「生活が苦しくなる」などの回答が多かった。5年生になると、「物々交換」や「貝とか石がお金の代わりになる」などの回答が出現する。前者のような回答を「個人的関係と社会的関係とが未分化なもの」、後者のような回答を「社会的関係に定位したもの」として分類すると、表7のようになった。2年生では、「わからない」という2人を除いてすべて「未分化」であったが、5年生では、「未分化」13人(59%)で、「社会的」が6人(27%)であった。なお、「変わらない」などの答は「その他」に分類した。これについて、 χ^2 検定を行ったところ、 $\chi^2=10.20$, $df=3$ で5%水準で有意であった。

5. お金をどんどん造ったら

お金はどこで造っているかという質問に対して、大蔵省もしくは造幣局と答えた子どもが5年生男子に3人いるが、他の子どもは「工場」その他を答えたり、「わからない」としている。

ついで、ともかくお金を造っている場所があることを確認した上で、そこではお金を好きなだけ造ってもいいかという質問をすると、回答は表8のようになった。肯定的に答えた者は、2年生が4人(17%), 5年生が3人(14%)であった。否定的に答えた者は、2年生が17人(71%), 5年生が19人(86%)であった。なお、5年生男子は12人全員が「好きなだけ造ってはいけない」としている。

お金をどんどん造ったらみんながお金持ちになれるかという質問で得られた回答を分類すると、表9のようになった。2年生では、「はい」が15人(71%), 「いいえ」が5人(24%), 「わ

表7. この世の中からお金がなくなったら

	2年生	5年生
未分化	21 (14, 7) 91	13 (6, 7) 59
社会的	0	6 (5, 1) 27
その他	0	2 (1, 1) 9
わからない	2 (0, 2) 9	1 (1, 0) 5

人数(男, 女)
パーセント

表8. お金を好きなだけ造ってもいいか

	2年生	5年生
はい	4 (3, 1) 17	3 (0, 3) 14
いいえ	17 (10, 7) 71	19 (12, 7) 86
わからない	3 (2, 1) 13	0

人数(男, 女)
パーセント

表9. お金をどんどん造ったら

	2年生	5年生
はい	15 (9, 6) 71	6 (3, 3) 27
いいえ	5 (3, 2) 24	15 (9, 6) 68
わからない	1 (1, 0) 5	1 (0, 1) 5

人数(男, 女)
パーセント

からない」が1人(5%)であった。5年生では、「はい」が6人(27%)、「いいえ」が15人(68%)、「わからない」が1人(5%)であった。これについて、 χ^2 検定を行ったところ、 $\chi^2=8.84$, $df=2$ で5%水準で有意であった。

6. 早く大人になりたいか

あなたは、早く大人になりたいかという質問に対する回答を分類すると、表10のようになる。「早くなりたい」と答えた者は、2年生が11人(44%)、5年生が7人(32%)であった。「早くなりたくない」と答えた者は、2年生が14人(56%)、5年生が12人(55%)であった。

なお、「なりたいたときとなりたくないときがある」というように両側面から答えた者は、5年生で3人(14%)みられた。

次に、その理由であるが、早く大人になりたいという者では、2学年を通じて「いろいろな仕事ができる」ということが7人といちばん多かった。理由の学年別の分類は、表11の通りである。

表11. 大人になりたい理由

	結婚	赤ちゃん	仕事	お金	勉強	車	わからない
2年生	5	4	3	1	1		2
5年生			4	2	1	2	

人数

なりたくない理由は、2学年を通じて「遊べない」というものがもっとも多く9人あった。理由の学年別の分類は、表12の通りである。

表12. 大人になりたくない理由

	遊び	加齢・死	たいへん・責任	労働	学校・勉強	その他
2年生	6	7		2	1	1
5年生	3			2	1	2

人数

7. 20歳の時、40歳の時、80歳の時、どうなっているか

「〇〇歳の時、あなたはどうなっていると思いますか」の間では、「がんばる人になっている」や「背も高くなり大人っぽくなっている」、「働いている」「大学に行っている」など成長や活動につながる回答を積極的的回答として、「ふけている」や「動けなくなっている」、「死んでいる」など老化や衰退につながる回答を消極的的回答として、「おばあちゃんになる」や「結婚している」、「変わっていない」などたんなる状態を示す回答を中立的的回答として分類した。表13は、20歳のときについて、その結果を示したものである。積極的的回答は、2年生で15人(60%)、5年生で12人(57%)示された。消極的的回答はなく、中立的的回答は、2年生で4人(16%)、5年生で2人(10%)示された。

表14は、40歳のときについての回答であるが、積極的的回答は、2年生で8人(33%)、5年生で13人(62%)示された。消極的的回答は、2年生で6人(25%)、5年生で4人(19%)示された。中立

表10. 早く大人になりたいか

	2年生	5年生
はい	11 (6, 5) 44	7 (2, 5) 32
いいえ	14 (9, 5) 56	12 (8, 4) 55
両方ある	0	3 (2, 1) 14

人数(男, 女)
パーセント

の回答は、2年生で4人(17%)、5年生で1人(5%)示された。

表15は、80歳のときについての回答であるが、積極的回答は、2年生で1人(4%)、5年生で6人(29%)であった。反対に、消極的回答は、2年生で13人(54%)、5年生で10人(48%)であった。中立的回答は、2年生で6人(25%)、5年生で3人(14%)であった。

8. 大人はどうして仕事をするのか

大人が働く理由については、まず「お金をもうけるため」とか「お金がないと生活できないから」とかというように、お金ということばで表現しているものを選び出し、「お金のため」として分類した。次に、「子どものため」とか「家族が生活できるため」とかいうように、お金ということばを直接使わずに生活の必要を述べているものを選び出し、「生活のため」と分類した。「みんなのため」や「大きくなったから」などは「その他」として分類した。表16は、その結果を示したものである。「お金のため」という理由を述べる子どもは、2年生が17人(68%)、5年生が17人(77%)であった。お金のことに触れずに「生活のため」という理由を述べる子どもは、2年生が3人(12%)、5年生が3人(14%)であった。

9. 大きくなったときやってみみたい仕事があるか

将来やってみみたい仕事について質問したところ、「ある」と言って具体的な職種を述べた子どもは、表17のように、2年生で15人(68%)、5年生で15人(68%)であった。

なお、子どもたちがあげた仕事を学年×性別に列挙すると、表18のとおりである。

10. 将来なりたいもの——お店屋さん、お百姓さん、学校の先生、銀行員、お医者さん、アイドル歌手、コック

「なりたい」や「少しやってみたい」というものを「はい」として、「やりたくない」や「あまりやりたくない」というものを「いいえ」として、「考え中」や「わからない」というものを「その他」として、それぞれ分類した。表19から表25は、各職業ごとにその結果を示したものである。

お店屋さんになりたいかについては、2年生では、「はい」が18人(72%)、「いいえ」が6人(24%)であった。5年生では、「はい」が9人(41%)、「いいえ」が13人(59%)であった。

お百姓さんになりたいかについては、2年生では「はい」が5人(20%)、「いいえ」が20人(80%)

表13. 20歳のとき

	2年生	5年生
積極的	15 (11, 4) 60	12 (8, 4) 57
消極的	0	0
中立的	4 (1, 3) 16	2 (0, 2) 10
わからない	6 (3, 3) 24	7 (3, 4) 33

人数(男, 女)
パーセント

表14. 40歳のとき

	2年生	5年生
積極的	8 (7, 1) 33	13 (9, 4) 62
消極的	6 (2, 4) 25	4 (1, 3) 19
中立的	4 (1, 3) 17	1 (0, 1) 5
わからない	6 (4, 2) 25	3 (1, 2) 14

人数(男, 女)
パーセント

表15 80歳のとき

	2年生	5年生
積極的	1 (1, 0) 4	6 (3, 3) 29
消極的	13 (8, 5) 54	10 (7, 3) 48
中立的	6 (2, 4) 25	3 (2, 1) 14
わからない	4 (3, 1) 17	3 (0, 3) 14

人数(男, 女)
パーセント

であり、5年生では「はい」が5人(20%)、「いいえ」が15人(68%)であった。

先生になりたいかについては、2年生では、「はい」が11人(44%)、「いいえ」が14人(56%)であり、5年生では、「はい」が5人(23%)、「いいえ」が16人(73%)であった。

銀行員になりたいかについては、2年生では「はい」が10人(40%)、「いいえ」が14人(56%)であり、5年生では、「はい」が9人(41%)、「いいえ」が12人(55%)であった。

医者になりたいかについては、2年生では「はい」が9人(36%)、「いいえ」が16人(64%)であり、5年生では、質問された21人全員が「いいえ」と答えた。

アイドル歌手になりたいかについては、2年生では「はい」が6人(24%)、「いいえ」が14人(76%)であり、5年生では、「はい」が3人(14%)、「いいえ」が19人(86%)であった。

コックになりたいかについては、2年生では「はい」が9人(53%)、「いいえ」が8人(47%)であり、5年生では、「はい」が14人(70%)、「いいえ」が6人(30%)であった。

以上の結果について、「その他」の答えを除いて、「はい」か「いいえ」かの学年の違いについて χ^2 検定を行ったところ

表18 なりたい職種

	男 子	女 子
2年生	絵描き、本屋、おもちゃ屋(ファミコンを含む)、酒屋、菓子屋、歯医者	会社、食料品店、喫茶店、おもちゃ屋、モデル、看護婦、医者、小学校の先生
5年生	小説家、大工、小学校の先生、科学者、歯医者、漁師、野球の選手	デザイナー、美容師、新体操の先生、郵便局員、銀行員、花屋、看護婦

ろ、お店屋さんが $\chi^2=5.50$, $df=1$ で5%水準で有意であった。また、医者が $\chi^2=7.25$, $df=1$ で1%水準で有意であった。

なお、以上の職業について、なりたい者の比率の高かった順に並べると、2年生では、①お店屋さん②コック③先生④銀行員⑤医者⑥アイドル歌手⑦お百姓さんで、5年生では、①コック②お店屋さん、銀行員④お百姓さん、先生⑥アイドル歌手⑦医者であった。

表16 大人が仕事をする理由

	2年生	5年生
お金のため	17(13, 4) 68	17(11, 6) 77
生活のため	3(1, 2) 12	3(0, 3) 14
その他	2(0, 2) 8	2(1, 1) 9
わからない	3(1, 2) 12	0

人数(男, 女)
パーセント

表17 やってみたい仕事があるか

	2年生	5年生
ある	15(7, 8) 68	15(7, 8) 68
ない	5(4, 1) 23	7(5, 2) 32
わからない	2(2, 0) 9	0

人数(男, 女)
パーセント

表19 お店屋さんになりたいか

	2年生	5年生
はい	18(10, 8) 72	9(3, 6) 41
いいえ	6(4, 2) 24	13(9, 4) 59
その他	1(1, 0) 4	0

人数(男, 女)
パーセント

表20 お百姓さんになりたいか

	2年生	5年生
はい	5 (4, 1) 20	5 (2, 3) 23
いいえ	20 (11, 9) 80	15 (9, 6) 68
その他	0	2 (1, 1) 9

人数(男, 女)
パーセント

表21 先生になりたいか

	2年生	5年生
はい	11 (4, 7) 44	5 (3, 2) 23
いいえ	14 (11, 3) 56	16 (9, 7) 73
その他	0	1 (0, 1) 5

人数(男, 女)
パーセント

表22 銀行員になりたいか

	2年生	5年生
はい	10 (9, 1) 40	9 (5, 4) 41
いいえ	14 (6, 8) 57	12 (7, 5) 55
その他	1 (0, 1) 4	1 (0, 1) 5

人数(男, 女)
パーセント

表23 医者になりたいか

	2年生	5年生
はい	9 (3, 6) 36	0
いいえ	16 (12, 4) 64	21 (11, 10) 100

人数(男, 女)
パーセント

表24 アイドル歌手になりたいか

	2年生	5年生
はい	6 (1, 5) 24	3 (3, 0) 14
いいえ	19 (14, 5) 76	19 (9, 10) 87

人数(男, 女)
パーセント

表25 コックになりたいか

	2年生	5年生
はい	9 (4, 5) 53	14 (7, 7) 70
いいえ	8 (6, 2) 47	6 (5, 1) 30

人数(男, 女)
パーセント

考 察

ここでは、子どもの社会認識の仕方に関して、小学校低学年を高学年との間にどのような違いがあるのか、また、違いがあるとしたら、その違いは「9, 10歳の節」といわれるような発達の質的な変化と考えていいのかどうか、考察してみたい。

子どもは認識において、言語的知識や経験、大人などからの伝聞等を利用する。したがって、質問に対する回答の違いも、そうした知識や経験、伝聞等の違いによってもたらされる。問題は、そのような違いの有無だけではなく、そのような違いをもたらず認識の構造における質的な変化の存

在に関わっている。

以下、4つの主要な質問ブロック——欲求、お金、成長、仕事——にそって、論述することにする。

1. 物への欲求から人間関係の欲求へ

3つの願いに関する回答結果を見てみると、2年生に特徴的な答は「物がほしい」「学業の望み」であり、5年生に特徴的な答は家族や友だちに関する「人間関係」の願いである。「人間関係」の願いが出現するところに、小学校低学年から高学年への変化があると言えよう。

小学校低学年から高学年にかけての物への欲求から人間関係の欲求への変化は、世界に対する間接的な態度の形成を意味している。いまや子どもは一人で直接世界に対峙するのではなく、他者の目を自分の内に取り込んだ人間一般（人類の一員）として立ち向かうことを意識するようになる。それは、ピアジェのいう自己中心性の克服の過程でもある。

ところで、5年生の応答の中で「照れながら語る」ということが見られる。これも他者の目を意識していることの証しである。彼は、自分の言うことが他人にどう映るかを意識し、「照れる」。話をしながら同時にその話を評価するという行為の誕生である。

2. お金を考え、社会の表象へ

お年玉の総額については、2年生も5年生も2万円代が多く大差はない。しかし、そのお金の入手方法については、5年生のほとんどが「働いて」ということを指摘しているのに対し、2年生では「働いて」の指摘は半数強にとどまっているし、4分の1以上の子どもは「わからない」と答えている。お金と労働との結びつきは、低学年から高学年にかけて定着していくものと思われる。

お金持ちになりたいかという質問に対しては、2年生は「はい」が多く、5年生は「いいえ」が多い。その主要な理由については、「はい」では「ぜいたくができる」や「いろいろなものが買える」（計13人）で、「いいえ」では「今の状態に満足」や「金持ちは嫌みっぽい」、「自分だけなのはダメ」（計10人）であった。後者の「いいえ」の3つの理由はすべて5年生があげたもので、少なくともそのうちの2つは周りの目を意識したものである。ここでも、認識の仕方に他者の目を取り込まれるという小学校高学年の特徴が示されている。

みんながお金持ちになれるかという質問に対しては、「なれない」とする答が、2年生（43%）より5年生（75%）の方が多い。これは、「働かない人がある」とか「お金を使ってしまう」などの理由であるが、子どもの目にうつる現実をふまえての答であろう。2年生に比べて5年生は社会的現実への観察はきびしくなっているのであろう。ただし、この理由付け自体は、2年生と5年生との認識の質的な差異を示すものとは言えない。

この世の中からお金がなくなったらどうなるかという質問に対して、「貧乏になる」とか「ものが買えなくて死んでしまう」などのような答と比べて、「物々交換する」「ものがただになる」などの答は、社会全体を考えたものである。それは、今回の調査の場合5年生で27%あらわれている。

お金をどんどん造ったらみんながお金持ちになれるかという質問については、2年生では「はい」が多く（71%）、5年生では「いいえ」が多い（68%）。お金がいっぱい造られればそれをもってお金持ちになる。こうした個人的関係の延長で考えれば、お金をいっぱい造ればみんながお金持ちになるという結論に至る。しかし、社会は、たんなる個人の集まりではなく、独自の法則をもつものであるとするならば、お金の総量は物の総量との関係で考えられる必要がある。そうした独自の社会的関係は、小学校低学年から高学年にかけて徐々に表象されるようになると思われる。

個々人を越えて社会や制度を表象することは、いくつかの困難を伴う。これについては、かつて

田丸⁽⁶⁾が指摘したところである。それによれば、はじめ、「子どもにおいて、『お金』ないし『お金持ち』は様々なことと結び付いて、対をなしている。対は個人的経験を基礎にして形成される。」対の思考では、「社会は個人の延長線上に考えられている。しかし、経験を積み、みんながお金持ちでないことがわかってくる。対による思考と現実感覚とは葛藤する。」それは、9、10歳ころ特徴的な認識であった。そして、「労働を考えることを通じて、子どもは社会全体を客観化するにいたる。」「社会的関係が個人的関係から区別され始める。」そのような認識は小学校高学年の一部に認められた。今回のデータも基本的には同様な傾向を示していると言える。年齢的にいえば、9、10歳を越えたあたりから社会的表象の可能性が増大するということになる。

社会的表象が可能になることは社会的な知識を得ることも意味する。「物々交換」などは自分で考えたというよりも書物や伝聞による知識に依っているのであろう。社会的表象が脆弱なままにたんなる「事典的」知識が増えた場合と、社会的表象を多様な場面で自主的に形成し得るようになった上で知識に至る場合とでは、見かけは同じであっても発達において大きな違いがある。その違いを明らかにするには、子どもの認識についての心理学的な分析が必要になる。

ところで、「みんながお金持ちになれるか」に関する質問で、2年生において興味深い現象が観察された。2年生は、たんに「みんながお金持ちになれるか」と聞かれたとき、「はい」は3人(14%)であったのだが、「お金をどんどんつくったら、みんながお金持ちになれるか」という条件を変えた質問にすると、「はい」が15人(71%)に増えている。5年生はほとんど変わらないのに対して、2年生のこの変化は特徴的である。おそらく、2年生は前者の質問において何らかの特定の場面を思い浮かべて回答している。しかし、それはすべての場面、可能性を尽くしているわけではない。したがって、別の条件を提示されると答が変わってしまう。その点、5年生は答が安定している。このことは、5年生の場合、たんに「みんながお金持ちになれるか」と質問されたときでも、少なくとも様々な場面や条件、可能性を想定して回答していることを示しているのであろう。そのため、新しい条件を加えられてもそう簡単には答は変わらない。2年生が、たまたま思い浮かべた場面に制約されて認識活動を行うとしたら、5年生は、さまざまな条件や可能性に基づく思考が優勢になりはじめているのではないだろうか。

3. 大人になり成長することのイメージに対する社会の影響

「早く大人になりたいか」という質問で「はい」と答える割合は、2年生が44%、5年生が32%で、高学年の方が低い。このように年齢が長ずるにしたがって、「早く大人になりたい」とする者が減るとするのは、今までの調査で一貫している⁽⁷⁾⁽⁸⁾。ただし、今回の場合、学年の間の違いは比較的少ない。これは、2年生で大人になることが年をとることや死に近づくことというイメージと結び付けている者が7人いて、彼らが増加に否定的な感情をもっているからであろう。

ところで、20歳、40歳、80歳の年齢別の大人観を見てみると、20歳のときに関しては、2年生も5年生も比較的肯定的な印象をもっているが(約60%)、80歳のときに関しては、ともに消極的な印象をもっている者がかなりいることがわかる(約50%)。このデータに関しては、2年生と5年生とで認識の変化を示していない。老人として生きていくことに対する社会的な苦境が、年齢にかかわらず子どもにこうした印象をもたらしているのであろう。

4. 仕事に関する社会認識

仕事に関する質問の回答結果は、2年生と5年生で類似している。まず、大人の働く理由は、ともに「お金のため」という者の割合が7割前後ある。また、大きくなってやってみたい仕事があるかという質問について、両学年とも68%の子どもがあると言っている。その職種も子どもにとって

身近かなものが多い。

将来なりたいものとして例示した職種については、学年によって選択の傾向が若干異なっている。お店屋さんになりたいというのは、2年生に多く5年生に少ない。その他の職種では、両学年ともなりたい者が多いのは、コックであり、両学年ともなりたくないという者が多いのは、お百姓さん、先生、銀行員、医者、アイドル歌手であった。とくに、医者は5年生ではなりたいという者がいない。なりたいという者が多いのはコックやお店屋さんなど子どもにとって具体性のある仕事で、なりたくないという者が多いのはお百姓さんや医者など苦勞が多いと思われる仕事であった。全体として、仕事の苦勞の側面に目を向けやすいのは5年生の方であった。

農業や工業などの生産労働に明瞭に示されるように、仕事(労働)は、自然と人間との関わり方を決定するだけでなく、人間と人間を結び付きをも決定する。仕事はもともと社会的な性格の強い活動である。しかし、子どもははじめからこうした仕事の全体的な姿を理解することはできない。子どもが経験したり伝聞したりすることは、仕事の部分的な姿である。たとえば、お百姓さんは、田畑を耕し作物をつくる。それは生産の喜びをはっきりと味わえる仕事である。しかし、それは額に汗する辛い仕事である。気候の影響を受け、それによって努力の報われ方も違ってくる。また、農業を維持するためには借金をして農耕の機械を購入しなければならないし、つくった物は市場で販売しなければならない。高く売れるときもあれば安くたたかれることもある。農業という仕事はこれらさまざまな関係のなかで行われている。その全体像を知るためには、子どもには社会認識が求められる。小学校低学年は、部分を見聞きするが、社会的表象のうえでその全体を関連づけて考えることはできない。たまたま知っている部分が面白そうであれば将来やってみようと思うし、逆に面白そうでなければやりたくないと思う。高学年になるとさまざまな側面をつなぎ合わせ総合的な判断をするようになる。そのとき、現代のわが国の大人たちの働く姿、その苦勞の側面に気づかざるをえない。そのため、お店屋さんにしても医者にしても(先生やアイドル歌手も同様な傾向にあるが)将来なってみようという者の割合が5年生で減るのではないだろうか。

たとえば、5年生のE. R. (11.09; M)は、先生になりたいかどうか聞かれて次のように答えている。

「先生? 体育教えるんだったらいいかもしれんけど、別にそんなに、まあ、大学いけるくらいの頭だったらいいかもしれんけど、でも、先生って何かあんまり金入らんって言うけー、あんましいやだ。」

以上、4つの領域の回答全体を通じて、小学校低学年と高学年とでは、経験や伝聞の影響を受けるという点では同様であるが、認識の構造においては対による結び付けから社会的表象のうえでの関連付けへと質的な変化をすと言えるのではないだろうか。

注

- (1) ピアジェ (滝沢武久訳) 1968 思考の心理学 みすず書房
- (2) ヴィゴツキー (柴田義松訳) 1962 思考と言語上下 明治図書
- (3) ワロン (竹内良知訳) 1982 子どもの精神的発達 人文書院
- (4) 日下正一 児童期の子どもの発達 1991 日下正一・加藤義信編 発達の心理学 学術図書出版

(5) 一連の社会認識の研究は、次の文献で紹介されている。

- 田丸敏高 1992 子どもの社会認識 児童心理学の進歩XXXI 金子書房
- (6) 田丸敏高 1988 子どもはどのようにして社会を認識し始めるか 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学)第30卷第1号
- (7) 田丸敏高 1989 子どもは大人になりたいか 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学)第31卷第2号
- (8) 田丸敏高 1990 続 子どもは大人になりたいか 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学)第32卷第1号

(1992年8月31日受理)

